県学校新聞コンクール

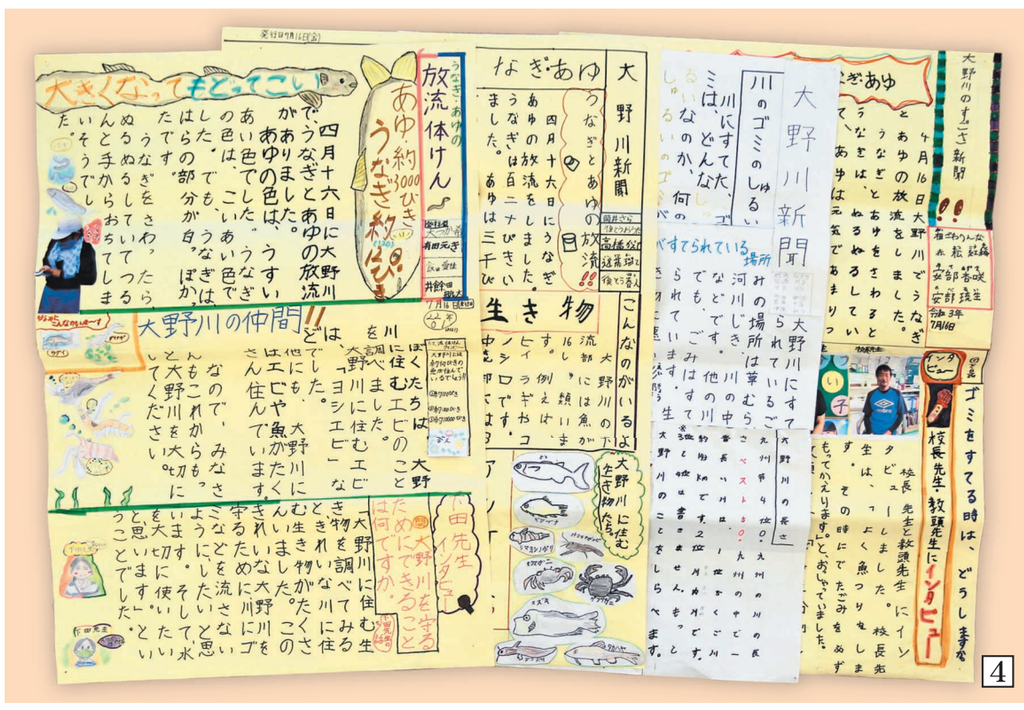
思い込めた魅力の紙面

教育に新聞を

第71回県学校新聞コンクール（県NIE推進協議会、県高校文化連盟、大分合同新聞社主催）は県内24の小中学校、高校、特別支援学校から33件、450点の応募があった。昨年12月23日に審査会があり、新聞部や生徒会などが継続的に発行する「学校新聞部門」と、児童生徒が調べ学習などの成果を新聞にまとめる「オリジナル新聞部門」の2部門で17作品が入賞した。最優秀賞に選ばれた紙面と作成した児童生徒代表のコメントを紹介する。

3

1


4

2

第71回県学校新聞コンクール入賞作品

学校新聞部門	
最優秀賞	大分豊府高 新聞部「大分豊府新聞」
	国東市安岐中 生徒会新聞部「校報 暁雲」
優秀賞	大分上野丘高 新聞部・写真部「上野丘高新聞」
	姫島中 広報部「やはず」
入選	佐伯鶴城高 新聞部「佐伯鶴城新聞」
奨励賞	大分舞鶴高 新聞部「大分舞鶴新聞」
オリジナル新聞部門	
最優秀賞	臼杵市野津中 1年「夢新聞」
	大分市高田小 4年「大野川新聞」
優秀賞	大分豊府高 1年「オープンキャンパス新聞」
	佐伯市米水津中 生徒会執行部「いじめ防止新聞」
	大分市賀来小中 4年「バリアフリー新聞」「夏休み新聞」
入選	佐伯豊南高 3年「豊南新聞」
	姫島中「はがき新聞」
	臼杵市下ノ江小 3・4年「暮らしを守る仕事新聞」「環境新聞」
奨励賞	県立聾学校 高等部3年3組「携帯新聞」「Challenge新聞」
	竹田市緑ケ丘中 3年「新聞の新聞」
	大分市賀来小中 6年「日本文化を発信しよう」

審査員（敬称略）
佐々木崇臣（県教委高校教育課指導主事）
生野京子（県ＮＩＥ推進協議会副会長、大分市賀来小中学校長）
田辺玲子（日本新聞協会認定ＮＩＥアドバイザー、県教育センター指導主事兼課長補佐）
道中聡（県高校文化連盟新聞専門部専門委員長、大分舞鶴高教諭）
西裕一郎（同常任委員、大分豊府高指導教諭）
北崎貴寛（同常任委員、大分上野丘高教諭）
佐藤洋一（大分合同新聞社編集局ニュース編集部長）

オリジナル新聞部門

3　夢新聞　臼杵市野津中

【審査評】
▽夢を掘り下げていこうという発想が素晴らしい▽夢（職業）がどういうものかよく調べている▽伝えたいことがイメージできる▽写真や色使いが効果的▽丁寧で読みやすい▽関心が生き生きと表現されている

代表・玉田日和（ひより）さん（1年＝顔写真）　教師の仕事について詳しく調べました。分かりやすく伝えようと文字を丁寧に書き、色使いやデザインも工夫しました。自分の夢を紙上に公開したことで、先生たちや同じ夢を持つ友達と将来について話し合うきっかけになりました。

4　大野川新聞　大分市高田小

【審査評】
▽体験や感想だけでなくアンケートやインタビューも盛り込み紙面が生き生きしている▽多面的に取材している▽見出しのデザインやイラストが楽しい▽注目してほしいポイントがしっかり強調されている

代表・上村朋愛（ともな）さん（4年＝顔写真）　大野川について調べると、いろいろな生き物がすんでいることが分かりました。生き物を守るために水を大切にしたいと思い、水についてのアンケートを取りました。見やすくなるよう、色を付けたり、イラストを描いたりして工夫しました。

学校新聞部門

1　大分豊府新聞　大分豊府高

【審査評】
▽見出しの表現が効果的▽伝えたいことが明確▽生徒の活躍の様子が伝わってくる▽月2回発行はすごい▽校内だけでなく社会にも目を向けている▽写真に力がある▽「先生方に聞く！」など企画が面白い

代表・板井梨里花さん（2年、新聞部長＝顔写真）　読みたくなる新聞を作ろうと心掛けています。見出しを読むだけで記事内容が伝わるよう、レイアウトや写真の使い方にも力を入れています。これからもさまざまな分野にアンテナを張り、多角的な視点を持って活動していきたいです。

2　校報　暁雲　国東市安岐中

【審査評】
▽大きな行事から校内の小さな出来事まで話題を広く集めている▽学校の様子が伝わってくる▽見出しの表現が魅力的▽新聞らしい体裁で読みやすいレイアウト▽生徒のコラムが面白くグラフィックスが効果的

代表・高石諒さん（3年、生徒会新聞部長＝顔写真）
「全校生徒が情報を共有し、より良い学校にしたい」と毎月発行してきました。安岐中の魅力はもちろん、地域との関わりも積極的に伝えました。今年1月に第300号を発行。今後も創刊48年の歴史を受け継いでいきたいと思います。

より良い社会の担い手に

生野京子・県NIE推進協議会副会長（大分市賀来小中学校長）

第71回大分県学校新聞コンクール受賞の皆さん、おめでとうございます。出品されたどの作品にも作り手の思いが詰まっていました。

学校新聞部門では、新型コロナウイルスの影響の下で、なおさら新聞で伝えることの意義が伝わってきました。確かな取材に裏打ちされた学校の様子が伝わり、躍動感あふれる見出しと迫力ある写真で読み手を引きつけました。多くの人が自由に行事に参加できないからこそ、その感動を記事で伝えようという意気込みが感じられました。

また、オリジナル新聞部門では、学校での学習の成果が紙面にまとめられていました。テーマは同じでも児童生徒一人一人の視線は違い、個性が輝く新聞となっていました。新聞にまとめることで、学習の跡が残り、自分の学習の在り方を振り返ることができ、豊かな学びにつながったと思います。

これからも身近な出来事に目を向けながら、より良い未来の社会を築いていく新聞作りにチャレンジしてください。